



鳴海城址

別名根古屋城、応永年間(1394-1428)安藤宗範築城、戦国時代織田方重臣山口左馬介父子居城となるが今川勢力が迫ったので今川方に寝返る。怒った信長と戦う(赤塚の戦い)が引き分ける。左馬介父子は今川義元に呼び出されるが寝返るやつは信用できないと切腹させられる。その後義元は腹心の岡部元信を置いた。元信は“敵ながらあっぱれな奴”信長にと言わせた猛将。その後信長の家臣佐久間信盛居城。

誓願寺

天文元年(1573)下郷家の菩提寺として俊空が開山、創建。
境内には最古といわれる芭蕉の供養塔。永井荷風の祖父永井士前らが安政5年(1858)立てたという芭蕉堂があり中に芭蕉像が安置されている。



芭蕉供養塔

大高城址

永正年間(1504-21)花井備中守築城と言われ、天文年間(1532-55)に水野忠氏居城、今川方から織田方寝返る。織田方から今川方に寝返った鳴海城主山口左馬介に攻め落とされる。これに対抗して信長は鷲津、丸根砦を築く、永禄3年合戦の時は義元の娘婿鵜殿長照が城主、兵糧不足に苦しむ松平元康が“大高兵糧入れ”を実行する。

永禄2年(1559)信長が今川方の大高城に対し築城、合戦の時飯尾近江守定宗とその子が守備、今川方朝比奈泰能の軍勢に敗れる。

鷲津砦跡

丸根砦跡

合戦の時佐久間盛重が守って松平元康(家康)の鉄砲隊によって陥落。

芭蕉は鳴海に4回訪れる
当時鳴海には俳壇が形成され盟主は下里知足(後下郷)20歳から俳諧に親しむ、蕉風志向
最初:貞享2年、野ざらし紀行、三河八橋へも、木曾路經由江戸へ
2回目:貞享4年江戸から、“星崎の間を”歌仙伊良湖の杜国を見舞う。
3回目:元禄元年鳴海一木曾路、更科紀行
最後:元禄7年鳴海一熱田、この年芭蕉逝く。

東海道:11前後町一有松一鳴海一三王山



鳴海宿 (熱田宿へ1里24町)

平部から西へ中島町、相原町、本町、根古屋町と続き作町で北に折れ山花町...丹下町の1.8Kmの町並。宿として旅館業は盛んであったが、江戸時代は石高4000石の農村でもあった。鳴海絞りの製造販売するなど多角経営の町でもあった。愛知郡106カ村を支配する尾張藩代官所が置かれた本陣1、脇本陣2、問屋2、旅籠68:天保14年(1843)尾張藩主の入部の時は必ず一泊、公家、大名も休泊、朝暮の使者の御馳走も多かったとか本陣は初めこの名門西尾伊左衛門が経いた。が嘉永の頃(1850)は千代倉(下郷家)に変わった。

永禄2年(1559)今川方の鳴海城に對抗し信長が築城、桶狭間奇襲の、直前に信長此処に兵を終結させたといわれている。



瑞泉寺

永徳元年(1381)大徹宗令が近くの平部山に庵を設け付近の人々を教化したのが始まりとか嘉慶2年(1388)足利義光が宗令に帰依、鳴海城主安原宗範も帰依、伽藍創建、宗令開山その後兵火に遭う、16世紀初め現在地に移る。江戸時代にも火災にあい、豪商下郷弥兵衛の援助で再建。山門黄檗式の四脚門、突出した重層の切妻屋根が特徴。

桶狭間古戦場伝説地

永禄3年(1560)駿河、遠江、三河を制圧した。今川義元は京へ上がるべく25000の兵を率いて尾張へ、沓掛城を出て桶狭間に休息中、雷雨をついた信長3000の軍勢の奇襲にあい討死今は国史跡の指定を受けた公園、義元の墓、七石表などがある。



今川方瀬名氏俊がここの大松の下で武將を集め評議した?
戦評の松の碑

田楽坪

もう1つの古戦場 桶狭間古戦場跡碑

長福寺

「義元公首検証跡」碑

有松町

池鯉鮒宿から鳴海宿までは距離がありその間松の木があるだけの寂しい街道筋であったので尾張藩は慶長13年(1608)桶狭間村の支村として有松村を作った。当初は阿久比から数家族が移住したにすぎなかったが寛永の頃(1624-44)には30家族ほどに増える。

絞り

移住者の一人竹田庄九郎武則が名古屋城築城に来ていた豊後の人達の手拭いの絞り染めを見てこれにヒントを得る。その後豊後高田藩主竹中氏の待医としてついてきた三浦玄忠の妻が有松に住み、国で覚えた括り絞りの技を村民に教えた。三河の木綿、知多の晒しの技術も加わり発展。

[弥次・喜多]店で散々冷やかし手ぬぐいを買う
“ほしいものまつ染よ人の身のあぶらしぼりし金にかへても”

[弥次・喜多]有松で道草したので急ぐ
“旅人のいそげば汗に鳴海がたこもしぼりの名物なれば”

